



悲劇的喜劇1

1: 会社員、30歳、男、の場合。

その男、『キッチリ予定通りに動く男』だった。いつものように会社を後にすると同時に帰宅過程、夕食の調理過程を頭の中でシュミレーションした。腕時計をちらりと見た。駅からスーパーへ。そしてスーパーでの買い物の所要時間。そこから自宅までの所要時間。調理の手順、所要時間。そして眠りにつく予想時刻。と、テンポよく予定をたてた。

しかし、その日はちょっと『いつもと違った』。駅にて、いつもと同じ時刻、同じ車両の同じドアから乗車したまでは良かったが、駆け込み乗車を試みた男性が『したたか』ドアに挟まれ、『なんだかんだ』で電車の発車時刻が遅れたのであった。さらに電車の中でハイヒールを履いた女性に『したたか』足を踏まれ足の小指を負傷。歩行速度を落とすハメになった。予定を重視する彼に『焦り』の色が見えた。仕事の疲労がそこへ拍車をかけた。

当初の予定より大幅に遅れたものの、スーパーでの買い物を済ませ、なんとか帰宅。疲労と空腹に耐えながら服を着替え調理を始める。今日は中華風野菜炒めだ。野菜を軽く下茹でする間にニンニク、ネギ、ショウガを素早く刻み、豚肉、オイスターソース、テンメンジャン、片栗粉などを用意、、、

仕上げに味を整え、味見をする。我ながら完璧だ。と、男は思った。

しかし、男は重大な過ちに気づき床に崩れ落ちた。

しまった、、、米炊くの忘れた。

悲劇的喜劇2

2: 予備校講師、27歳、男、の場合

男は疲れていた。いろいろな意味で疲れていた。そろそろ疲れていた。

大手予備校という世界ではなんだかんだで「個性的な講師」というのは嫌われるので、彼は日々「窮屈感」を味わっていた。そこに加えて最近の生徒は「しつけ」がなっていないのがさらに多い。少子化の影響でビジネスとしての競争もさらに激化、、、
久しぶりの休み。平日の休み。部屋でゆっくりしたいが、いろいろ購入しなければいけないので市街地へ。昨日、同じ場所で街頭『ティッシュ配り』をしていた女性のことを思い出した。仕事とはいえ、彼女は『いい笑顔』していたな。と、思ったらなんだか気分が軽くなった。また会えるかな？ と、淡い期待。

帰宅後、洗濯にとりかかる。好きなジャズを部屋に流してコーヒーを入れて、読みかけの本を読む。平和な休みの昼下がりだ。

洗濯機が停止の合図の電子音を出した。洗濯機のフタを開けてみると、何やら白い『ワシャワシャ』したクズが『洗濯物という洗濯物』にこびり付いていた。あ、、、 男の脳裏に街角のティッシュ配りの『おねーちゃん』の笑顔が蘇った。そして洗濯機にもたれかかる様になされた。

あのポケットティッシュ、、、ワイシャツのポケットに入れたままだった。

悲劇的喜劇3

3: 飲食店経営者、45歳、男、の場合

その男は飲食店を経営していた。昨今の食材のコストの値上がりに頭を悩ませていた。それはもう、悩ませていた。半ば瘦せていた。小麦、乳製品、その他もろもろ、で、今度は『卵』ってか。少しでも経費を節約せねば、、、ガス代も上がる一方だ。せめて日本政府がもっと安全性を売りにした『国内生産』に力を入れて、近隣諸国への輸出を増やしてくれれば、少しは国内の農業状況が変化するだろうに。あと、安全を売りにした化学肥料の輸出でもいい。日本の技術と施設なら可能だろう。新聞記事で得た知識をもとに思考を無駄にめぐらせた。

ま、何にせよ、節約だ。ある定休日、彼は隣町の知り合いの同業者に会いに行った。その同業者もやはり食材の値上がりには頭を悩ませているようだ。人件費を削るか、それとも営業時間を伸ばして『根拠の無い』収益増に期待するか。お互い『こまった時代だ。』ってな感じで、また今度。

うちのアルバイトの一人が『黒魔術』かなんかの本を読んでいたからな。うかつな事はできんな、、、

その帰り道、普段利用したことのないスーパーに入ってみると鶏肉が特売で安かったので購入した。ふとアルミフォイルが目に入った。いつも買っているメーカーと違うせいか若干、価格が安い。ま、買って損はしないし、忘れないうちに買っておこう。得した気分で帰宅した。

翌日、いつもの店に行ったら、同じ商品が3割引セールになっていた。

悲劇的喜劇4

4: 硬派高校生、17歳、男、の場合

剣道部に所属するその男子高校生は硬派に振る舞う事に『男の美学』を感じていた。それはもう、感じ出していた。剣の道に一直線。しかし、所詮は高校生の男の子。女の子の視線は気になるわ、女の子の注目は浴びたいわ。なんといっても、高校生活も3年目。今年は入学式の時から気になっていた「愛しのあのコ」と同じクラス。

去年の体育祭では『鉄の男レース』に出た。第一関門、『プールで水泳50m』で『腹の調子をおかしくした』ものの、その後の難関を切り抜け、『ど根性』で1位でゴール。しかし、水泳パンツ一丁で、カッコ良くゴールのテープを切ったものの、そのままの勢いでトイレに駆け込み、その模様は校内で伝説になってしまった。まったくもって『お笑い芸人』のような伝説になってしまった。

今年の体育祭こそは男子生徒全員参加の「棒倒し」で勇ましい様を「愛しのあのコ」に見せつけてやるのだ。夏休みの間には、あらゆる圧力に耐える体を作るべく、飛び込み用のプールの底で『死と隣り合わせ』の『無茶』なトレーニングもした。

体育祭開催の1週間前。体育祭実行委員から突然のお知らせ；保護者からの『あの競技は危険』という苦情のため、『いきなり』でなんです、今年から「棒倒し」は行いません。代わりに新種目「大爆笑! 仮装リレー」を急遽行います。男子は全員参加よ。

なんてこったい。

後に彼は自分の『お笑いの才能』をクラスメイトに見いだされ、文化祭のステージに引っ張りだされた。彼の意志に反し、硬派なイメージが一転する。

5: コンビニ店員、25歳、男、の場合

その男は寝ぼけていた。それはもう、寝ぼけていた。

彼は学生の頃から『とあるコンビニ』でアルバイトをしていた。長いこと働いているうちに、行く人来る人。他の従業員は入れ替わり、いつのまにか、店長以外では、全時間帯を一人でこなせる唯一の店員になってしまった。最近、アルバイトを初めたばかりの女の子(けっこう可愛かった。店長は『その外見で』選んだに違いない。と、彼は思った。)が『たったの一週間』で辞めてしまい、『次』が見つかるまでは彼の出番が必然的に増える事になった。早朝の日もあれば、深夜の日もあり。不規則極まりない生活を余儀なくされた。

ところで、従業員から店長以上に信頼を得ていた彼には他人に言いにくい『悩み』があった。2年ぐらい前から頭髪の『はえぎわ』がゆっくりと後退し始めていたのだ。工作中はバンダナを着用しソレを隠していた。(本来ならば店員のバンダナは『御法度』だが、彼は店長を「バンダナを認めなければ辞めるぞ」と脅していた。)

その男は寝ぼけていた。それはもう、寝ぼけていた。鏡の前には育毛促進剤と制汗デオドラントスプレーが並んでいる。鏡の前でデオドラントスプレーをワキに『しゅー』とやろうと思ったのだが、実際手に取ったのは育毛促進剤だった。直前でそれに気がついてスプレー缶を元に戻した。あぶない、あぶない。脇毛を『ぼーぼー』にしてどーする。

そして寝ぼけたままの彼はチューブに入った『整髪ジェル』で歯を磨き始めた。

悲劇的喜劇6

6: 自称ストリートミュージシャン、23歳、男、の場合

その男はアルバイトをしながらバンド活動をしていたのだが、よくある『音楽の方向性の違い』でバンドが解散。ソロでストリートファイター、もとい、ストリートミュージシャンになった。つい先週は付き合っていた女性にフラれた。彼女曰く、理由は『音楽の方向性』の違い。

彼は「ありえねー。」と、最近の若者らしい反応をした。

しかし、つい昨日、女友達からこれまた『イマドキのかわいらしい女性』を紹介された。「ありえねー。」と彼は喜んだ。狂喜乱舞した。

ギターケースを片手にふと立ち寄ったラーメン屋で、注文したラーメンにコショウをかけようとしたら、『コショウのフタがはずれる』と言う、昔の漫画のような『ミラクル』がおこった。「ありえねー。」

駅前で気分よくギターをかき鳴らしていたら突然の豪雨が。彼も商売道具のギターもずぶ濡れだ。「ありえねー。」しかし、その豪雨は10分足らずで止んだ。とりあえず、アパートに帰る事にした。猛スピードで走る自動車が道路に溜まった水を彼にぶちまけた。「ありえねー。」と、つぶやきながら商店街を歩いていると薬局が視界に入った。その店頭には『某洗濯洗剤』が。

その洗濯洗剤の名前は『アリエール』(あり得る)。

「ありえねーっ!!!」(行き場のない怒り)

7: 分かりやすい小学生、9歳、男、の場合

育ち盛りの小学生の男の子であった。それはもう育ち盛りだった。典型的な育ち盛りの男の子だけに『肉食』であった。それはもう『肉食』であった。動物性タンパク質と鉄分とビタミンBの摂取量だけは『アメリカの特殊部隊』並であった。そして、やはり『典型的』なために野菜はちょっと苦手であった。

今日の夕食の主役は『特大ハンバーグ』であった。ダイエット中の人から見れば、チーズも入った『カロリーの化け物』。『リックドム』部隊も『全滅』だ。(おたくネタ。失礼しました。) 彼は『狂喜乱舞』。オリジナル『喜びの舞』を食卓の周りで踊りだした。彼が最後にソレを踊ったのは『豚肉のショウガ焼き』の時だ。そういえば夏休みに突入する前日の晩にも舞っていた。ただの『お調子者』だった。一応、クラスの人気者であったが、まだ彼は高校生ぐらいになると『お調子者』は女生徒に『あまりモテない』ということを知るよしもなかった。

しかし、世の中よいことばかりではなかった。ハンバーグの隣の『オシャレ小鉢』の中にヤツがいた。悪の権化『ハウレンソウのゴマあえ』だ。人類の歴史において、『どこのどいつ』がそんなものを開発したのか、彼には不思議でならなかった。彼の両親は『食べ物の好き嫌い』に関しては厳しかったので、逃げる訳にはいかなかった。先週の学校のテストで『ヒドイ点(自己記録タイ)』を記録したため、ここらで信用を回復せねばならない。まるで日本の政治家の気分だ。

とりあえず、勢いをつけるために『ハンバーグ』をひとくち。『至福』の二文字が彼の体内を駆け巡った。そして視線を移して『ハウレンソウ』攻略を開始。途中、体が何度か飲み込むことを拒んだが、むりやり胃に押し込んだ。息もつかずに押し込んだ。そして、あと一口。あと一口で完全勝利。あとは好物のハンバーグ、、、突然、彼の頭から足の先まで激痛が走った。

舌を噛んだ。

8: 飲食店アルバイト店員、27歳、男、の場合

その男は飲食店アルバイト店員という肩書きの他に、自称『役者のタマゴ』という肩書きを持っていた。現在はTVコマーシャルのエキストラや、広告、バラエティ番組に登場する「仕込まれた一般人の役」などの仕事が主だが、いつかは『本物の役者』になってやる、と野望を抱いていた。

その日は朝も早くから都内某所の撮影所に呼び出されて、TVコマーシャルの撮影だ。そのコマーシャルの主演は『宣伝されるべき商品』ではなくて、モデル上がりの某女性芸能人。彼女はその「気まぐれ」で「わがまま」な言動から関係者の間では『困ったチャン』と呼ばれていた。で、CM撮影開始。順調に撮影が進んでいると思いきや、その『困ったチャン』の『気まぐれ』に付き合わされ、撮り直しの繰り返し。なんとか3パターンの撮影が終了した時にはすでに彼は『アルバイトの方』に遅刻しかねないという状況にあった。今月に入って既に、2回遅刻をしている。これ以上は許されまい。

これまで2回しか利用したことのない慣れない駅の構内を彼は走った。早起きに起因する睡魔と闘いながら。行くべきホームの場所があやふやになってきた。頭上の案内を見る、彼の乗るべきA線は3番および4番ホーム。よっしゃあ。と、ダッシュ。エスカレーターを駆け上がる。ちょうど電車がホームに到着しており、発車する直前であった。駅のアナウンスが「ドアが閉まります。駆け込み乗車はおやめくださ、、、、」

彼は「そんなもん、知るかーい!」と駆け込み乗車を敢行。「間に合った。」と、彼は安堵のため息。しかし、『上り』と『下り』のホームの確認を怠っていた。50%の確率で彼の選択は『誤り』であり、従って電車は『彼の望む方向』の反対方向に走り始めた。

「う、うそおおお!?!」

しまった。しかし、次の駅で降りれば、なんとかアルバイトには間に合うだろう。と、彼は思ったが、、、その電車は『快速』電車。車内アナウンス曰く「この電車はA線、上り列車、快速、△△行き。次の○○までは停車しませんので、ご注意ください。」

発車してから言うんじゃねーっ!!!

線路は続く。彼の野望と悲痛な叫びを乗せて、、、

9: 日本語講師、33歳、男、の場合

その男は日本語学校の日本語講師であった。日本在住の外国人に日本語を教えていた。ある晩、彼は個人レッスンの為、最後の戸締まりを独りでするハメになった。いつも事務の職員は19時には帰ってしまう。時間は夜の21:30。あー、疲れた。とっととアパートに帰って寝よう。明日は、フィリピンからの留学生のために事務の職員と一緒に東京の入国管理局にへ『大事な書類』を取りにいかなければならない。本来ならば、それは彼の仕事ではないのだが、そのへんの『日本の移民管理』仕組みについて知っておきたかったので志願したのであった。いつかは自分の日本語学校を持ちたいと思っていた。早い話、独立したかったのだ。今の日本語学校を運営する社長がバカだったから。

どちらかと言えば、彼は用心深い人間だった。なので窓という窓、すべての鍵をチェックした。電気も非常灯を除いてすべて消した。そして給湯室のガス栓もチェックした。完璧だ。と彼は思って、自転車に乗って自分のアパートへ向かった。帰りにコンビニで夕食を買った。彼の好物がまだ残っていた。今夜はついているな。と、彼は再び自転車をこぎだした。

♪バ〜カ社長、バカ社長〜♪と恨みのこもった『奇怪なオリジナルソング』を歌いながら自転車をこいだ。アパートの駐輪場に到着。ここでもちゃんと自転車の鍵を『しっかり』かけた。コンビニのビニール袋を片手に階段を登り自分の部屋のドアを開ける。ドアを閉めると内側から『しっかり』と鍵をかけた。2回確認した。しかし、、、

「う、うそおお!?」

冷蔵庫の『冷凍庫の方』がちゃんと閉まっていなかった。小分けして冷凍していた肉類や彼の好物の『PINO』がエライ事になっていた。

10: 不動産仲介業者、27歳、男、の場合

彼の仕事はいわゆる『お部屋探し』だった。入社が決定したのと同時に上京。会社の方で格安のアパートの部屋を手配してくれた。さすが業種が業種だけに、良い部屋を用意してくれた。広さも適当だし、近くにコンビニもある。彼は新しい住処をエラく気に入っていた。

ある日、彼は仕事中に救急車で病院に運ばれた。虫垂炎だった。で、そのまま入院。特にそれ以上の問題はなく、そして退院。よかった、よかった。

帰宅した彼は、医師や看護師たちがいい人そうだったので、あの病院も悪くはないが、やっぱり自宅は落ち着くね、と思った。TVの電源を入れた。『医療事故』のニュースをやっていた。報道陣のカメラのフラッシュが『パシャ、パシャ、パシャ、パシャ、、、』TVには謝罪会見を開き、頭を下げる医師達が映っていた。さっきまで彼の担当医だった男が真ん中にいた。

マジっすか。

ちょっとゾツとしたが、自分の体には何も問題は無いようで、ま、仮に何かあったら病院を『訴えれば』いいか。とノン気な事を考えていた。突然、彼の携帯電話の着信音が鳴り響いた。彼の女友達からだった。

女友達「こないだ、あなたの部屋に初めて遊びにいったでしょ。」

男「ああ、俺が入院する直前ね。」

女友達「あまりにも、あなたがその部屋を気に入ってみたいだから言わなかったんだけど、、、」

男「何を？」

女友達「あなたの部屋、ちょっと『いる』よ。」

彼は彼のガールフレンドがその女友達は『靈感が強くて有名』だと言っていた事を思い出した。

マジっすか。

女友達「あはは。でも大丈夫、大丈夫。『大人しい子たち』ばかりみたいだから。あはは。じゃあね。」

『大人しい』って、あ、あのな。急に背筋がゾクツとした。が、彼は気にしないことにした。一年後、彼は同業者の『極秘ブラックリスト』に彼の部屋が掲載されていることを知る。『自殺があった、他殺があった、何か出る』などの『すばらしい経歴』を持つ部屋のリストだ。

しかし、彼があまりにも『鈍感』だったので、『この世のものならぬ存在』たちも『すっかり呆れて』その隣の部屋に『引っ越し』をしたという。そして今度は、その隣の部屋の住人が『引っ越し』をした。

知らぬが仏？ 鈍感な時は強い。